吉原徒然艸坤

ヲ6
3116
2

宮内省圖書寮

門曾5
號422
卷2

門ヲ6
號3116
卷2

五十三段　きはゝたの事をなきむとおもふ

えも

今日もうまゝは酒とのまぬやうふなきんとおもへ
ども是をてかゝくに古をもとめ特是ぬなき大酒ふの
ゝ言しに白波の人もさるとていやゝ形る人を来
たりて形ゝる絃日も断長合あるゝ方ゝきい約束
ふけゝ機嫌ゝしかるつきくいきを形てゝ
けうゝ伐童ふうけて切るの沖るのゝ見えくは
ゝふ逸物きゝ白う袴てあゝいつゝまゝハすゝ一
年のうちもかゝくのさとゝふの女郎もまゝ志

かくれて新造の時よりも添ていゝかはしける
事もたひかさなりけれは其のつとめかたをは
しりつくし人もあまりいよ〳〵物を実かくし
不実とも泥ぬるのゝ諫もうけれ

五十四段　言といふ物かそれのかれ様
　　しき物なれ

野郎といふものゝかくそなしうちて遊ましき物なれ
いつも紫なかうしもらい諸大明神の氏子なれん
とらせてもふくかれ誰かしか実情して不断なる
なにを文をかけ其の銭からいて手住なとさくらつ

また世にふかも物やうすてひき物て年寄き
野郎は当分ましいてといふものけまて添
いくつにも若衆にて手おほかせきのちの手能
おしそらふとてふくし年増けある女郎なりしは
明日神にて墓石なんとしても妻に女房とさまて
来ぬふんいきそらへふらくしと見へぬへし塗し
て家よりも志まつきさん為るむかへよろふんも
なとものつらしかふん叔母の神の里なくなりて
浪人者かさふなりて陰し母役なと銭つとむる
ちり物いゝのかうるまてあさましいかなる

うつくしきをんなとも別深うき形をして日
もとの書き記えんまふいとむつまじくふふく
りてはんなくしいもとも女郎なしとおもの
こそなうしめもきしかうしいあいんはとは
絵をもくもかきさらえあうときまふ泊を拾
つけなしきんは利形の時いくらむしも内裏
志ものくいうしみぬ

五十五限　表よりみて物のもつ形しいふく
ロおし
表らせ社童しきうそふきいしく面白きる焉の

藤ふ行うろもくしは六ッ切の門をれ
ちれて形て夢の形ひ泊りのもむも表るのうて
絵てくれ豆い物うもをけしくしく中の丁通
もも編置きにしていきつと志くる姿もてあ
てなん表をかしかるめが羽織志く物しくる小
神ともいくしく鄭の景しきは表んくと社か
らけふてもようきは能ものいひある声はくく
やくふても知くは古ふ絵みくく大一能形と
い点表一下きと志くしくきさして絵朱みて
もなきふ表くもふけて寄るくのきをけるふぬ

東京のうちふ若の御ぞ紙結ばるゝいとふく
しゐ色ありたるもの実にて遠くい所ともとら
ぬものなれとふ東ゝとうちとけぬつま笠
いと中又結ぶんゝと野ふしい面白のゝん菓屋
かゝゝ有ゝんも きれるくゝ色きつゝろいはか
しきよき上郎のてゝちんゝはさせて菓屋ふい
て紙造て東京の腰ゝゝはゝふ方仕寄ふゝく
てゝいつゝゝいゝゝんれ

五十六段　神仏ゝもゝんのきふてゐ白
きんちゃゝも若の大勢ある日ゝゝいくゝ山ゝの

ゝ

五十七段　くゝきんゝの元ゝ紙ゝうて
くゝゐなき女の勇様ゝなて見きしゝ形ゝも
の良きんいさゝゝゝうつるくゝゝに百性の振
法前様ゝなつて素茶と又て何ゝゝふ茶ゝとつ
きゝゝ社女中ふ寺つゝけゝふ茶きん茶ゝゝゝ
つゝ紙結ゝ紙さゝし此ゝ中ゝ事ゐ発ゝゝゝふ
ゝゝに文ゝゝ笑くゝれゝも物ゝ形ゝゐゝゝし
腰ゝゝなゝゝゝゝゝませゝゝゝいゝはゝゝ
ゝゝゐきゐゝてゝこゝ社ゝゝゝせる元形ん

とうつおのれが境界をあらそふ物をかきるなり
うつくしく家おさまるべうとて

五十八段　達人の人をそる服ハ

ニおもてとのゝやうなる服ハきらゝしくもあやま
りなき物なりつくしかたく女郎のてを
んりけをきてをそる事あるんふ初心なる
様とおもひていつまふうけうはまり人あり
あまりふ色深くして世ふ有りてもむとく
ふくあるまゝ行しもおもりてもをつけぬ人ら
又きらしかしとあてして誠やあるんうきに

やあるんと業に於る人あるまゝ誠のハあら
ぬとゝ様のいつる形をハしとおとふ人も
あるまゝさきのふさきくゝしてきい形る
身つきもれとつやくゝきぬ人あるまゝ少
るゝゝる形るさふもあらぬなと事ふ人あるまゝ
よ様のいつわりのあるゝうちうてあきけて男
ふくあるまゝ又ゝ初てけるゝ志ゝぬ身るやわ成
風情ゝて様るゝ見ゝうんとゝる人あるま
ゝゝ様ゝけ様ゝ志を持ゝて合点ゝてゝ
しもあきむうそいつるとも誠ふ志ゝる人ゝ

姫のうちのたちまちうせたる人の前ふ
てこのさまをうしなはれ給ひしも有
しまてもかくれなく新しきをぬつてきい
なくさくん人のまつるやうに見えんとむし
眼鏡をてのうへにはいけ給ふ如し但りやうは
たしそうをまてきいきんの形をおしきうを云
へきふいあらば

五十九限　武人久我領をを通りきふ

武人市町河原を通りきふ小袖髪うちまて
いうきうき女郎柿のうまんの中つをいつてうる心

洋うくうをかるやうをと男二人おきて
云ふおもしきまをしてぐしていふをを三浦
社方張海をおそうるよりつよふおそし法
しうる時ハ金盥をやんうう形き女郎をて二代
目をもおうをぬ振昌なりうるよ一立といふ物
をハ人をもおそうぬ物ふきんまやうなりうる
をを立ふいふ物をハ人をも云をぬものよ中

六十限　東大寺社神輿東寺社義宮
新町の九郎助稲荷初年の神をして三浦の女郎
建立をををふうの君新造のうをををてきうる

支々なる盤をもつて白流のやうふつて行いけも
なくらい結ひて出あるひけるハ頃拍津川新造
の盤ハ好きふいいう侍るつくんとかけるハ
古支拍ふいその女郎の知る事ふいとそうそ
ふ〳〵なきつるそ拍侍ふ作をとるハ此津川
古凡の時と見て高世の頃をとそ知つきそれ
おいなり立〳〵のおそれあるあるあ盤法ひ市る
元きりしきついむそひてそ出市る知いそのの
おのうなり形るらそ法ふ侍いて結そ侍ふれ
市る

ひとつもの二本

六十一限

多経品川のお女仕者なる古ふ八まんの栗屋
のよ称流といつる古き小面ふ法つそ今も流
侍のちや屋なあるあるつて一間なる鹿と
名付て好きつて数きそまそ知るおきてり
ち者

六十二限　揚石助ふかきふ

西路二和女

頃妹栗屋者ふかきふくそものとと新女あそ
西雀り一代女なる書りそ

六十三限　横川の行宣法印り中侍しふ

姫〻の去る法師ゝ中行そうしは法師より收むの
童体形〻女郎は和合の形ありて然の童体形〻

六十四段　吾竹は葉かそ河竹は葉清し

動之郎は間に猶〻竹〻恋は清〻大芝居〻云は
竹〻出上流ふ入〻るは動之郎〻

六十五段　退凡下宗のそゝきは
之婆品の去形婆さぐは存錢品は主〻形〻

六十六段　十月を神無月といひて
十月を神無月云て蜀のまは形をもは物白〻
の月も遠なり但〻夷講は南月を形とそゝる

なり方の月社上のいのこゝろ四月の事そ見
形〻云説出はもゝ世法を松きその時ありまて
四月のきそゝはなるもあるゝなれはその格も
形〻十月いのこ高位ちゝの客ふ意し
ゝるゝ人その例あり但〻ゝは姫ゝん〻ゝ
の人形〻

六十七段　動動のある鞠かゝる俗法

あるゝる女の家る語述たるゝ合は多〻て
ゝる人形〻いふ〻陸奥国婦〻重ゝて女ふか
ゝる時はその家社ゝふ語述をたるゝ

の素姿と云も高き流るる事水を分つがごとし
しの立るる所にて云つれ遠き世はいとをしい
まして此の物語にて後今は金銀をもてやくるをい
まいつる

六十八段　粧ひ人と思ひてうつ波ハ

きいふ女郎をまるいもんとする時いをくふ
うけて垂るるる形をくるの去るもあいの
たの物をも今はうてあふうれるけふ
てきまるる絵なるるる

六十九段　比叡山よ去沙汰初信

書里ふ女郎偽りの起請と云うるつるるるか
るれ客ふ思うるる上林の菊蛛書きそるる女
郎の起請文ふまるるひあるむるるいハ舎かと合
点るる客も起請かるるるるるを代いき
も形るるまる心中ふハ誓と切て指を切て福の書
紙ふいまて送る世ふ人福るるるるるるるふ
稼出るる

七十段　徳大寺大臣　大臣陵奥北遠別南の時
八丁堀の大臣陵四面流て周囲のるき手代を
出るて吳室の世話役をせるるるふ何来の女

抱きて小屋のうちへ入りて妻室のかたへ
なる柳のもとのかりて鬢ゆりさきて引ゆ
ゆりて有りし事ありて女をとゝ〳〵碧体不
り入おの〳〵中者又の禅門堂
て案遣ひる多別所あるいは何函〳〵のほう
きゝん女指くもひぬ成志ゆくの内も仏寺の内
ゆゑゆゑゆき中ゝ所ゝして女をいぬしふう〳〵
して引ゆゆる柳をいりをきれゆゆつゆそ
んゝゆる石なゆれいゆて杖つるゆ所れて
あまてなきき怪〳〵ゆゆゆるといつを

中條流
秀伯庵よ

七十一限　竜山殿たてらをんゆて
屋敷ゆゆ社女中蜜通の事行ゆるふつゆゆ
ゆゆゆゆ三月四月ハ神ゆて踊ゆれと家子
七月ありゆれ月ふなれハ女ゆゆ笑ゆて男ふ
かゆゆつけゆふおゆ業なんと用ひられと
つゆふおゆ有ゆいのことはゆやゆの癖ゆ伝
ゆゆ人新をゆゆてなるつゆれゆゆおゆ紙
きゆゆふ中條流の馬砂中ハ小の虫をゆ紙大
汁むし紙ゆゆゆふ所の碧ゆある〳〵ゆ中け
ゆハゆのゆてきゆつ所〳〵おゆ〳〵ゆきゆふ主

くつを志ほさせて

七十二段　経文殿の縁をゆつる

新造なりの琴をゆつる事を上へあつへ以頼
けやうふきけてかうい城様きゆふさるものハ
左のうつ形をさやうふしうるとハ三浦の吉文
山もゆさきぬしの新造とハ見てなりとせけ
を見をいるしく脇山と以上女郎ゆひそ[illegible]
をうつ形をくハ以てふくうるいしくハ共
ぐるしくしもしてうをちうをかうい
さしあるをまあくんをまれうを盛の女郎

ゆをかやうけうを志ほさせうくるなん待を
きる

七十三段　人の田を論をものの

元しの客我論をる称なりしうをて称
あをよを客をつけをしてあをて光新造ま
しを大門ゆつういしをふ志ほなりをてあを
いも形ゆ形ゆ論をを引をまるれハ
つけをる客をハ志ほいうふかいハしい
をれハつをる子供をのつをる者ををを
なきうをなゆ称ハ元うをんをてまあを

のなれをいつくしみそだてさぶらんといひ
きまうらといひしむうしうてうの歌

七十四段　呼子鳥は春の物なれど斗ていひて
かんこどりはきしきしきもいひていふ物
ともさうふ志きもの物にあらぬ法ふ物
なりけれ也神と書て和尚ふおうしと訓るあやし
きことなれ事ておのれ血を分るとは物にんちもは鶯
なりけんら侍ふいひしるを東宮とり物ふん色女集
の中ふ弁ふ言ふ川原のそしふたちを君の五
条ちうの月ひとうてるなりかをてかの東宮

ちうの名いまをたちを君の名ふうをいれしき
うも

七十五段　夢事は凶なりけ
よ紅つの事たのむ一うしは女ちを踏ふ直ふ物
見物うふ物と彩むもつふ物ふいう物ふうをも
いまわひ者ふてたのむをうしは多限用なして
たのむをうしは侍故さうふ合てたをれ事
墨亂をのふてたのむ一うしは彩物も時ふあと
をいうをものふて彩むをうふも桜ちも不事物
ちき法常要物ふなりたのもしかしは事りつ

まもりてついぞやもし先うを仕立てるとして彩む
なりふり整昌ふつまりてとんきい姿を形るうや
あて人の志しとともたのむ一うちにうけちらし
てついしじゆうる望をとくもあのまもれを
せい云てもかりらに参形るハ結句うもし衣
もも表もうもの一うまて國う寄られハ形ん
たもいまもも志をうれハちうろ〳〵書む
をいしあうるせやて森のうるうち書を高て
事をこしきふして意うみしう事れハ補りけち
らして表を逃もし中ちもれをうう的ふ代

てて一時も離きに つてをハ身形〳〵の礼あり親
方の強張ふ形し女郎の性なんを張ふても形
しらうんたい高あをれハきうんあし〳〵ふ
きをふをしてごうもかをよいやうふど形る
うを

七十六版　秋の月をかきを形く月七張も
竹形を

月ふあう張てなく月七張ものハ形しいつの紋
日うて女郎のうつふいうう七付けの者ゆ形て
てを代うう〳〵ふをうんハ七うつ事

たりとこそ侍れ

七十七段　仏前の大燈籠と申しきは

燈籠の縁成ふのしるべなる時は腰くくられぬる

こそ侍りけれ。ちんら花束は世地獄きれば

かくるこそときしひて生死をいむ

なり地下の燈籠ふ成ふ特人る特ちの上下うて

座出らるけるとはある習慣の人地ふの人をふ紋

紋上下うて著りかくきれうて

七十八段　想夫恋と申す楽を

きくにおんとうと言ふ餞別のうたを言ふあらば

元亀四年七月廿九日
記了書写了

ときとはお彼岸文まのこのうるなりおもふふ

なりて弟をも家をもうしれ家れて早くて

して お彼岸とはいて日とんも天蓮れてだくまん

宗とて志ひそのこうき宗音ありそのうきき宗

音ふひきのとんとそうるうきくあまて言ふと

てとんといふれて

七十九段　年の行の時経ば

仏沙の民ふるるふ法をし沙弟院ちんらあ

る香の間ちちちふやうてしかれ

うちちはのなりてちかくちちふまく彼

きうたて袴きたるのさていぬるや取てなれい
ふしやうかりしも只かくとかりふ所れてる
紙を羽織ふ藤琴のうちゐてまりてあてふか
んぬくもうちーさやうの酒をてらの酒を
ものたりてんらさくーけもい中つてく
者うてなれくいを志つまてぬんいりまりぬる
うのやちていつくまてを尋ひまんくいて
しうい志てくさーてくまくー城てめーを祇ふ
産ふのうてふ靖のをてあてうてをふをてこ
ものをてきてきふいぬーうい事あうぬん

庶の為なるべき江戸
庶子、元亀別紀
江戸図壁

ものて對動よ及んて自るつれ待てに出家ても
かくのふてき なるもの待ーてやされき

八十限　実限寺入道

津第院ちん樂八幡社系の待ふ庶の武方法門ら
てくく先使きらて立ひーとてふ一動ふど
きうの吸ものこうんるうぬものうぐやき三獣
ふうてふてやぬを待ふ事を支風方笑出
湖ちーうれくて待てれてて相ちくー
ふてき物ー者てふ ーやてきよーやされ市れて
おてき咲いてーて待て采てせられい女房

ゐるとまて紙を形ふてうけきせ法ふ者ハきれ
りてその時そこる人のちうきて待ーう語を
待をしる

八十一段　ある大福長者のいもと

ある大ねん賢そのいもと人を家をさしもて
もてなる小志ん業をあるとき形をきよ性
みしてふいける甲斐形ーつまきのこ我なの
ことに達者なるんとおもいてきつうくまつ
その心特と形をーものむとらふハ他の変ふ
ちをそ人間幸住の志やー山ものうを者しも

かをそを業をうつるなれ志事ーれむうけ
ことをいーしをおそふしる賢のつるうとそこ
やう形をいをんふるきやうふ心つをひそ
をー人間社いなる自他るつをて正形口ふ形を
くよーしをふひて心をいをつやーを祝い
をそふんい心つうれ意おうよるいせれ
をを形を賢水いつを旅有浦ち賢水を形
て加をて形きたのふむさと賢水を考ふ
ふをけうーをもきに事をふるれと
ちろはをつを悪会きをまをと歯を咎志ぞりて

大鏡
寛永廿年寅

かゝる世のためしにもてつまゝ給なり昔くう〻しく沙る賢水と申しうつくしきものゝ玉ふふ
笑てつゝしい持るものゝ上ハ男ゝしくもおぼんきとゆゝしうゝしく臨てそのゝ人
矣のやうふ大切ふたゝしくもてつゝしいそつる事なるうれ沙るもの女の恥うしもつと
もすくなるのゝいうてつけなるれうれ沙る悪事ゝとゝ多のふしてたちあいうゝか
ゝ事自らの儀とやうて賢業を求さんいふ
せいのつゝかゝん事、大鏡二百文とる 村上什張

古仏陸奥のかゝゝ高やつゝ賢水つゝて
うゝ形る附ハ大酒がゝ食もさゝもきに女に
ふかゝゝよゝに男色ともてきれハ心ゝこゝに
えゝてやゝゝ楽しゝやきゝゝ人ハ世楽
をかきん為る富をゝ孫ゝハ月まつゝ人堅固
ふゝて楽んゝゝあるて独富あて何名形る
事ゝゝゝもはゝゝのゝかゝゝんハ
まつゝゝ貴者の賢ゝてゝおゝゝ楽何をゝ
ゝのゝゝゝせんゝの拵ハゝゝつゝふぢん
と笑ゝゝ紙ゝて赤形ゝゝものゝまんゝ見

しはのつゝを書きなしてたのしきことゝ
いふ人しきりに性ふしてかゝる事ありしゝ
あるこのまゝるやわの女郎のさしもに吸つけ
を書てせつ水うんとうのまきしんまい志
うしをふいらてきよ志やうもそなはる
もつく所水一平竟いよいよ方々かんら柳
の特る事ハ水きよもつゝ一つよりハよりなる似
ゝ

八十二段 瓶ハ人ゝ答つゝ抜く

小倉ハ人ゝ答つゝものハ特通流て小わら

しゝも癖ゝしゝ行きうん水るハ右も志
のひて行ゝふ小倉ゝ人花ゝまて咳付られも
志ゝて志見ゝ水ゝ百二人ハふけ法ゝハ
あるゝ不くゝれなゝ一人ゝしゝがてん
きゝけて

八十三段 四条黄門信ゝ

四郎左衛つ陸奥ゝ
たいゝ道るゝてハ行んきゝ水き考水て先生
てゝいゝ經文のハ行きゝもゝて義深のゝて
なけ見しゝ今かゝ村五間ハいゝ水ゝ

きゝに待らう喚ゑそのに其とそんきは手もへふ
三浦に高尾小紫さんちやなしまて名を待らす
其下の菊はうさうちまも初まくはう紫なしく
うしかまましきやいましく山本は小主水名讃
花のちとせ山やはちつ吉巳やまゑうく山咲色
なんと時はよ孫まくし格まのも手しはまつ内
とぬこ出けるを世界をてうぬまして天地を一
吾にのこ出ゝあはうく我尊のおさめ郭中流に
ふして表ふしうをしまはをろの維うらしは
とらへも郭く伊藤二人うつかとゐうとも郭ら

帯をハサムり
色道大鑑

一幅帯
掛補むらしくも
ゆるつそ

てしとら郭中おうしくふきやう郭てし今は往
ゐの光まて気をそれといつしく風情にちるきにして
ちかつちや我のこ耳行やう郭てむかしは常の
ちうも世まくむかでおそしもく廉ちいさく見
えたとるむそひえも郭くついをきゑたまめく
衣るうをわそく丸く出しのひしくきよ孫一人
も郭し南世は帯も繻子か一幅を婦し三黒の綸
たのまて引きみむそひゑは大郭るまか椽の六
としまめくもそ済るあづちなとく我たてぬう根
なそせいのひしくきよ孫は一ひしうり郭て何しく

[illegible]

他りるなかの[illegible]は昔ふうにぬいた[illegible]

[illegible]のゆえにいかなる[illegible]て如郎立間の家か

きしにさんちやむ[illegible]ちやの屋にもふ内まい家を

つくるにもあるとてはやくはせるさせも

[illegible]ちの時はきしにやんうにおき

[illegible]ものにまきにはれのつくに文育[illegible]ふ

もなるに如郎のとぶはあしにうにてのた

つ形て

八十四段　何事も迎土はいやしく

何事も（東ゝ物ゝ）東ゝ物といやしく好つゝ形とにもを

江ゝ之味線い和ゝにいつても江戸の之味線やの

中付ゝにあつゝるかゝにいつとの細工くも

和ゝに脇ゝにもつゝ江戸の[illegible]付歴し

付ゝにん中裏方ゝに言葉ゝにあまゝにゝ

ゝにもゝ志ゝにんゝの物を得ゝて持ゝを江

い古代の[illegible]人の教の間ゝにのかん形あゝよ

く布ゝにちやゝにゝんのゝにの内ふもゝにつのかん

なゝに伐工夫ゝにうゝに[illegible]花のうゝ形ゝこのうん

形ゝにゝいつとのゝにゝ調ゝ付ゝにゝにゝん之

[illegible]もの一本

味線ハ三つ緒をとりて何とか調るも
叶ふ所を西國にてはやんうと称す云京都にて
うせうと称し江戸にて故うせうと呼れ
と調るハきつとる事國にて江戸にてうし
せうと呼ものを味線まきにてもよき
調る所を

八十五段　建法弘安のうらハ

源氏物語ふるひ系のものにて七月七夕系
ものを形如中ハ長く社衣形をしけ毎
系にして町方にて神にもて衣形の系

者にてハやうく如中ハ成ものにて町方ハ
竹の葉を紙にんにふる形ハ新おのらき
まく書付家の形をきにやうく如中の
衣ん竹くるハいふ衣形にけ
ら〳〵者れとひめをいふ古系也
にて紙にて百姓ハ表(つゝら)にて人形と
似て言き本のようけにく系に何とか
系ものさくふうく習ふ

八十六段　竹石葉形坊

坊ものの表入坊やんうと形きうく表やうく系け

表紙つゝら
表紙考へし

[illegible]ふ女郎ふ送[illegible]ものハ何[illegible]
[illegible]かし[illegible]せ[illegible]ハ金銀[illegible]
[illegible]れハ[illegible]
のしもいうふ[illegible]ハ中[illegible]て調[illegible]巻物
ふ婚[illegible]
[illegible]れハ[illegible]
婚物ハ[illegible]
[illegible]仕[illegible]買[illegible]
[illegible]金ハ内[illegible]
ハ備[illegible]物[illegible]
[illegible]ハ遠[illegible]

[illegible]ふ素[illegible]の親一門[illegible]
[illegible]
[illegible]ふ女[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

八十七限　たつのおかいものハ
山口社初[illegible]の先ハ[illegible]
[illegible]

八十八限　陸陽沙有宗入道
かよう[illegible]郎[illegible]江戸の女郎

[illegible]

八十九限　多久資ちゅうきょう

ちんを新仏ゆうきょう中村助之丞殿のふ家
の中ふく好きのようきうく紙高ひて高うかの

おうつくといひくる女よおしてすくをく楽器
量をくれ凡結日当かく形をうなるやうな
らひなくぬやうみて又なりく楽後る神くをけ
ま〻く人皆をくりるおうつういくと
松評といひくるこの蘆をつけて古を家るの用
山形をおつくのをやくく紙をけてをのちか
をやの山を郎おかくの頃るくる紙をくてあて
う法いくひお物ゆう珍好くも宵水本おくふお
しつくるくて

九十限　法多羽流の法附

京四条河原の涼川竹と申芸者のかたれ江戸へ
きこえ[illegible]市川竹と申芸者[illegible]
助と申候て無[illegible]せ[illegible]出[illegible]
[illegible]ふ[illegible]物[illegible]
[illegible]と[illegible]遊[illegible]
[illegible]初[illegible]
[illegible]れ[illegible]竹[illegible]助上方[illegible]立[illegible]
けてら[illegible]

四色紙要考
七本丈の誤カ

[illegible]の[illegible]を[illegible]上[illegible]ふ[illegible]れも[illegible]小
[illegible]郎[illegible]郎[illegible]
[illegible]の[illegible]ふ[illegible]
江戸[illegible]
上方女郎の[illegible]竹[illegible]助[illegible]
[illegible]竹[illegible]助[illegible]
[illegible]供[illegible]

九十一段　六休礼讃は法然上人の弟子
山家の物語は京四條大和尚伝助と申子右を源
右衛門はかいしゃくを仏に赤をぬくとか

つき小宿を志まりて後泥ら出しといふ野良帽子
は古衣をたちまてうつまりて小ものおもしろき子
なしのかうしの家紋好て元禄のそしきのら様
そうてひろまりける女うちはさらひして来いる
出るするもはしく泥ら出そしめたるよし

九十二段　むかし釋迦念佛は
三浦まて全盛の七郎兵男に仕着をしけるうち
元禄のら様出し花色をとをしきかれたりき

九十三段　よき細工を
よき伽羅の油は香具に念をいれつゝつくりしゆゑ

せむしかあつしいゆらく松やまをつくりて

九十四段　五条内裏には
五条の河原には越後といふもの河て廉の武
吉原の諸をしはあつまり衣泥ちをとらへてるふご
さも我かつて好もののあつて誰とうれ向きたれはそ
うら男とも捨てて渡しをあまりはそうしらといひて
見てまいらせたゝ赤孫のそうらうてそんしけ
るよしあそ

九十五段　国の別る人の諸を
石川の河原にはそうりかきかきりの達者の行る人

早稲田大学図書

のちふて日待のあそびふらしまこさきい
つる特るを出しうをりれい人ら水石川ら
きうとすまやしあるくもたやそくのちま
んもやもちやきいきうを石川流石のふ
てこの紙書ゑまき城つゑ待るを夕重弾うき待
うつまふあしにまけて中うきんしてゑうれけ
るいうしくつまきしくしくに無あうてくしもそく
てうる者くやんこうなきうふかうをやうれ
たうまれいうやうのうもゑきつをうるうきお
わゆうくいくつまき人形くいうくしうんしいい

たうんれうをうくそつくしと人のいいあまいまう
いうたうくたうう知うるうう我無者うをれ
をいけもなくてやをうかるう通ををのい振
なりまを人の答意なをもけいをくかをくち
をうをうをも神るうけををたうをの事形く
てたいてはあをつきかうを成いうくきくや
てをふ物くくせたうをはいてなくをも是をと
らをんをいいくる誘る色をく形を者きいうく
く雲形ををくもの形ををれををくつを形をくく
るもつうく

九十六段 よつて人ハ無智無能

をもつてよしもハむしやくなきやうにそうてた
きハ主人の子共君きミにしあしかしねハ
又の前にて人にもの申やうにておとしのそ取し此
ともしらひ申かしきかしハ笑へしかしも常
者の前まてハさしほともこ居へし之

九十七段 又ある人の許まて

又ある人の去年まて女郎をあつめ香をきかん
として能き名香をたきけれハよ称とらも段しく
みつきりなるにあまた男共中にあしかしほとも
る名香をはふ入は志やしして焼るらつてき香の
あつまる香をたくに付てあしき白い紙にまとめて
あしくそあれこれらにもほつるにやとかくそうに
いつかたき香をはふの志やほ支度つて取き
うけ取てしそよきき人仍しは善きく人ハおしの
事もよくらくえへ見えしまて

九十八段 第のとうあかしとおもひて

よ称よのりあつしはんと思もしいうふもつ
くてとして元しをそうてうつまふなし詞をく
あつらんまハ志かしきうやりもとは静かなる

宜しけれどいふに黄しうちよき人の志
しやうなるは女郎もおもひつし物之大うへは
うらしむるさ[illegible]ふきねるまて志らなしるる
気色して人をなひうし続ふきるゆくひよし

九十九段　人の物をとしひゆるふ

人のその[illegible]銭みえうるふいくそちもあるしあて
私まうしなうむはそねし志きまやものゝえつする
やうなる風情ましらし続うて見えうるよからふ
ねるなりて色しりうるあまきつきも打よきうらと
みやしと[illegible]ひそてよふん又続るきそねなる人なれ
ろ物つくろへるさう見せんうるまへさうて常さ
へ袷ちとれは古性の姿形うんはおとなしくえ
えなましく〳〵でのやかなまくは常とる大ゆふ
うけて結ひあゆむ足つきも仕舞なしきやうふ
みゆきても古人の風情はよきそ通うとのそと
みつ[illegible]法されはそのまゝ古形ま気をつけうつ
し紛まるうそも根のかとぐろうれ庇形底の風
うそいとし結編そんの羽織編子の常もとのつ
うふ色まだしは黒茶ての裃おおつろかなうしは
黒形し[illegible]きけ続長く力の鞘へうちうけるるも

なやらなるぬらいかやうに書よいわるる新造
も書るれたまて

百限　家もちる家耳ハ

家もて結ぶよハ家の外ハ内のまよハ入まるや
なりしやうに形き社家ハあるうちいの若樹まふ
立入の猫ぎうやうのものもくげようまも孫
ハ石橋うかふ蓮蓮光ものかくまんがうに
頃具布形ままる唐紙ふハ何のうちもはきむ
なる書前人の字繼ちかて又ちる社家
みて形ひうんハちてきるうちいきうて

ハ学ちてもかしまきふかるうしまるうか
うちもやうる書れうるるやちんん先も四一光ふ
見ハ社しまのはふ見をつもに廊下のうちまて
かしはをくういきまる庵る入ちるいるや
ゆるもまるる

百一限　丹波ふ出雲しちあふ

赤布ふえちるるいふ布あるいるり山をる
日色家ゆて使者の常姫ふ飯をあるるる女を
見古しいの姫うや者古更まるるなるし丹前物
山うまるれまし橋法使ちる不なれハ

秋のこ法いちやのせん肩屋のぞうこ浦のまん
之かつるきやつるとあまささむて万日計つ
いてふいき緒つら是我とつていんして早さし
よきていくきらるふ彼吉女瓶を傾出し飯をあ
たへつる依之濡いくしらんしていうふ人し
其の吉女のうききめ由流しとらめきや是下形て
となりたくしていえいおのしあやしうてい
うさ滝まも云ひ形しうやぢう計ぞうしくに遠い
しらやふいふしく庸しく於とうけのこうそろて
年のもとして云ひいしと義る感涙を催ふしうて依

之濡なるかうしうて於とめしく物志かをゐへ
き良しうる神なを傾てこの吉女いうきる由緒
あらき人形て何のくらしらいかきん子細うるそ
あまつしと云まれいそるまそいけ事升得らい門
番の妻みていう血の形まやもとうしいふなそ何
の便ふもしねやつまていをぢいの為ふ瓶の銅
うい代いうさせい吉瓶の名もあまた者ありてさらふ
しなうしと以つい香曲昊授ふして依之濡ぅ感
涙もいかつふ堪うそ

百二段　やうい箱ふ見ゆるものは

そのかしらはたいこきうけいがうかりて者自慢ふ
ゆをまけてお腹のちかく七ヶ条者といたりて
皆於女白粉よりうあいうなりて形ん丸金を
じきつうきうせん聖賢のおしへのやうふき
とくあいしうきうその名をしらいて自慢の
事七ツあり

百四限、人あまつてつまて

人あまつてつまて見物よりあとしに上林の母てお
のらは酒きけんる発を押てうそうきうと
をしらしむる我ら先きの井戸うふ行あり

牛そうさうてと
ゆきてうさうゆ

てうきくうきうあるとて発を奪つてふそうえるくと
て立ちまをたるふ又うつを遮てきんそうし
て行あつて酒よしたをれ発ととぶの中へこ
ぶしい入て異意形きたくく皆人家方をうんを

百五限　南代いまは妨ふおそしまくく沈
ちもんいまく形ぶこうてまして南くこう
元祖うせ山のへや形そしこきりの出形ゆる酒
てたんをれ四五六の引出し銭接ひらけ行い
てむうきはきまきまきんくくまるけあくく若
をうぎふとうれしに文銭うせ山自ひらん

さゝれ歩きの音にきこえたんと我つらんされ
ことも清涼しもされ給ふ何とぞよく尋ねよと
侍を出しまして求むる所望しと侍らずして九ツ時
引出しのそこしくのなかより侍りしと申されたり
つましらは文所より出しやとてまいらせをまゐらせき
是なしくのよりは尭もまてつたみるなれともかし
のら弥達は好めるもの恨みし所に越後守
尾ひなうくの注文に神と使と奉る書けるにし
きやしと藤壺北君へ侍く候らふ秋の跡く草の
彼の花さかきかみ出てき弥く神とあらしんと

侍るは何ゆかさつりぬへきと申されたりけるも
言勝の女郎に情をもこしらへの道にかしこ
く俳しゝしらやうく出ともら所になしとも
としく云侍りしと

百六段　常在院のつき鐘の銘は
古文前集のうちに根本は白楽天の作と侍るを
古能にかゝせて春物にせんとせしにおしやく
所なるおのこ彼句我見侍りける後宮佳麗三千人
三千寵愛在一身といふ句侍る一志んの志ん一
のまつりと書たりあやまりなりしんと申侍りし我

[illegible]おのおの言名ばかりして
[illegible]者のごとくいひやたらふあやまりて待るを
一色と書かとてこうして待るを一色といふ
[illegible]つきうして一人のむすめあつかひ一色ナニ
不審ハ三十ノウタ何ニカトトヽマラン
々、モ処一首ニトヽマル心ナリ

百七段　人あまた古をひして
[illegible]ものいふを友なひ非をしらず待るふ
道場の念仏堂のたもとに妙信院とかける古き
石塔あり詩をもて言ひの間をうしなひていまも
[illegible]と中待つるを堂僧ありとしるしるし中待

[illegible]と女郎師匠のもとなるに大なる袋に書き
[illegible]ふ袋に言むしてさかりの
さてしばらく法て各々待るを三浦内言ひと祀
一年半さうふるを待るに人皆集る

百八段　那蘭院寺にて道眼聖人談義をし
[illegible]大に喜ぶ人思ひて出ふ所中を忘れて
[illegible]残人皆心つきてふ女房
[illegible]感待るを

百九段　質助信ふ[illegible]なひて

[illegible]の女中をあらしてさらいて下げて[illegible]
いまさきてぬうちに彼女中のつきそうか[illegible]
ふ[illegible]まし[illegible]用事もやあるんとあそ
[illegible]と出てそれをつきそうて
[illegible]のをうけたのを求めさきそうふれ[illegible]
なる[illegible]形女郎[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]の女中の下女[illegible]
[illegible]
[illegible]の二階[illegible]

百十限　二月十五日月出ずる時

三月十五日隅田川演芸[illegible]
[illegible]の絵[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

宿持をして男合点して女房をむまくこしらへ
きをそなへものを引出さるゝ時はむつ
と出ないゝ出しるていをして祈をして
金湯をそなへきをして百〳〵なりをする
百十一段　八月十五日九月十三日ハ
八月十五日九月十三日ハ名月として大物日なり
志ゝしけれハやゝそなへきをして西うぬ人ハ
なし

百十二段　志のゝ浦のあまの子ハ
皆男社湯女の志なりしも松〳〵伊勢保の山

社会をもつて情ゝいとんやむの色をそめ湯ゝ
志しゝとゝ形〳〵社ゝをそれゝきゝもおゝ不
かゝゝはおやきゝかゝゝ世をもむか
つゝゝむいゝをもゝ一なれとも
つゝ女なれハ志ゝぬ国の人ゝゝも情をもつて
むゝきゝけてかゝゝかゝゝなて
ゝゝを女のゝをして色情をゝゝ形てか
くれハ志ゝぬくを形無者おゝとゝつをゝる志い
なきよ行をゝ藤物法をゝやきん不のゝをも
いゝむ古ゝのゝゝ形〳〵法ゝんゝをつをぬ志ゝ

あまりてもあらえなつてら江の人ハ孫にしきて
みしなからん面白きる事のまへ一し結女なりん
ふつけてよも電燈の色好かしなりみむ男ハかく
あやしき女の為ふあつらふ身をいつはりになさき
んやいとさやしハもおもひてきらりすわきつれ
白ひも名香のなしく美く見ん猶らそなりれ
胡麻の油からずしき衣の森魚にさき八墨まうら
ふをけ髪もこうれあおくはしもあふれふ志の
ある つくもなかりん人々只色好まさらんまハ
志らし

百十三段

空月のまとかなるこそハ
空月のまとか明る事ハ志ちふくる迄をば好て
うきね一夜のはらその月るさまそてうそうさ
ますえつねるやあらん好きそいの事あまハ哀
住たる懐もなくしてきくるまてふをしちう続
く只ひ常住平生の念かひりまてあつ中ふ宗く
の衆住を取して後麻すて志わもしうけんとお
とふうちふ哀ふ只出きまて大門へつけふのそ
むとき日比のてまん一事も成就をはいふうひ
なりて年月の悪性とくねて此色もし勝らちふ

ありてあつまりあふ所は歌も謡も立さわぐの
みは志つかなるおもかげはしたへとをやしい
つる詠ひを記してもやけく世にまふるもの
は次男酒呑なとは我もあふてみるしあら
まほしぬはやくひらきあらぬはらしとまつよ詠達
よくしもは家まつし年明て後頭もらてかへ
らは志らすてもなき身と云もし志やし読つく
るうしは勤そのうちはうかそうさうくよき男
にあいうきもきあふにくつるは全譜代に明る
くしまそうるきは銭なきくつらには寡婦なす若に

もとつくさは曲輪を出る時清き明くまつらるる
なくて身よりなくく志つか明もそ

百十四段　こころしなくに

とこしなくつに全盛さんとおもひつきはいましくに
若楽書生と云はつらくぬ町席を竜もするをしくと
是をせしめしやむ時明し全盛をする不一ツにも
春数あいきやうに二種あり酒にのみ藝能くその
あ息のあそらし不道をはきくして持さきさるも成
つしまかく氣情をも起りてそくぎくれは借債し
もなくほりも志うしくもわらはいふに及ぶまじ

百十五段　八ようなる一年

八ようなる一年又ようていとく輝くいと面白
きのふいらんと云又ういとくきいと人はなる
多くと又ようふ人をなふとしてきいるなりは
やうんと又又きはのおしくふきてなる形を
と云ふ又同をくるきいとふふうをしく
りらしきと又是ようきはの輝のおし
へふきてなるとまくくふその数きはけ
る事一はきいいいるすいるは事きと云
時又う祢つうつてやなきうんたきをつくる

きふうてやなうはけんといひてうきふきひつき
らはきえくうつきなり待きつく諸くるりうき
て無しき

抑亭種考、吉原考稿月錄二回

吉原はじめて草　字東

作者はいまだしれず　年代不詳

なれども寛永六年この作ふるし

はじめてこれを刊行せしもの遠江屋

冊子なるを行のゆえを刻したるもの丁数多

き故なり